



# ヤングケアラー相談窓口が中心となって 取り組む支援

～豊中市子ども安心課のみなさんにお聞きしました～

## 一関わった世帯の状況



**Eさん**：中学1年生の男子。登校状況は問題なくクラブ活動にも参加。しかし、家族の食事の用意（しかも食事をする時間が各自異なるので、何度も用意をする必要あり）や家事、妹の世話を担っているため、自分の時間がなく勉強をする時間もない。寝ても疲れが取れず疲れ切っている状態。

**家族**：母（精神的に不安定で職が安定しない）と妹（小学5年生）、弟（小学1年生）。生活保護世帯。妹にはこだわりなどの特性があり、放課後等デイサービスを利用。弟は登校できている。

**親戚**：近隣に住んでいる。妹の学校および放課後等デイサービスの送迎支援。長期休暇中の妹の世話をしている。



## 一支援のきっかけと支援内容を教えてください

Eさんが中学1年生の秋ごろ、担任に相談し、学校から豊中市子ども安心課のヤングケアラー相談窓口に相談があったのがきっかけです。

すぐに、中学校、小学校、福祉事務所（生活保護担当）などの関係者が集まり、ケース会議を開催しました。

Eさんや親戚の負担を軽減するためには、母への働きかけと妹への支援が必要だと考えました。

ケース会議では解決すべき課題として、

- Eさんの負担軽減（家事や妹の食事の用意）
- 母の困りごとへの支援（自身の就労に向けた資格取得のための学費の心配、家事が苦手、Eさんの学習の遅れ、妹のケア）
- 親戚の負担軽減（妹の学校および放課後等デイサービスの送迎）

が挙げられ、それらに沿って支援方針をたて、下記のとおり役割分担をしました。

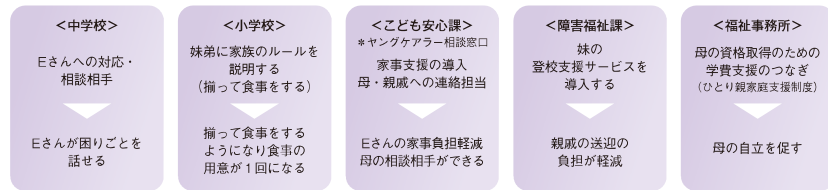
ヤングケアラー支援コーディネーターは、母と親戚の方との窓口で徹底し、関係機関との連絡調整を担いました。

また、役割分担のひとつとして、Eさんへは中学校の担任、母へは小学校の妹の担任とそれぞれ心を開いている人からアプローチするようにしました。

家事サービスの導入によりEさんは、自身の負担が軽減されたことで、自分の将来を思い描けるようになり、目標をもって進学にむけて地域の学習支援の場に通うなど準備を進めています。

また、母は自身の不安が軽減されたことなどで食事の用意ができるようになり、資格取得のための学校に進学しています。さらに、妹に登校支援サービスが入ることによって、親戚の負担も軽減されました。

### ▼ 支援方針と役割分担



支援後

- Eさん：家事負担が軽減→自分の時間ができる→進学など自分のことを考えられるようになる→学習支援の場に通う→進学
- 母：困りごと（自身の学費、妹のケア）の解消→食事の用意ができるようになる
- 親戚：妹の送迎の負担軽減→母や本見の相談相手ができるようになる

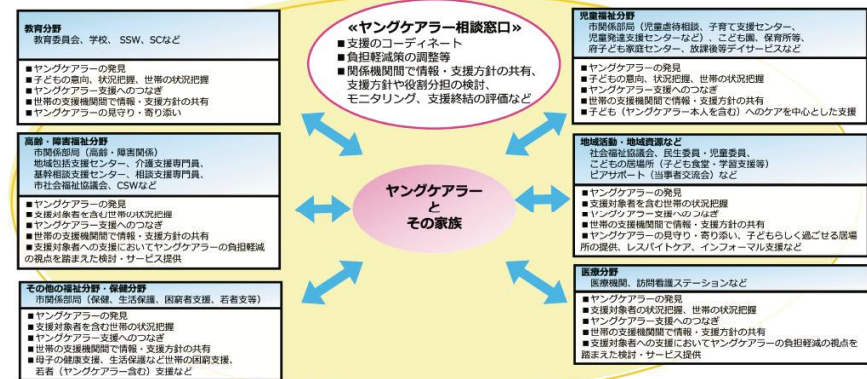
## ～豊中市の支援体制～

豊中市のヤングケアラー相談窓口では、社会福祉士、保健師、心理士、指導士が配置され多職種が連携して対応しています。また要対協を活用して多分野の関係機関と情報共有・連携しながら、世帯全体を支援することで子どもの負担を軽減できるよう取り組んでいます。

## 一ヤングケアラー相談窓口で大切にされていることを教えてください

- 相手のことを否定せずに肯定する関りを大切に、程よい距離感を保つことを心がけています。また、ご家庭の思いやスピード感に合わせて、サービスを提案するようにもしています。物理的な負担軽減だけでなく、心を支えるサポートも大切だと感じています。
- ケース会議をする際、関係機関によって支援に対する温度感がバラバラのことがあります。バラバラの温度感をフラットにして、まず、事実を捉え、それから調整に入るようにしています。とくに日々子どもと直接関わっている学校との信頼関係を大切にしています。学校から相談があれば、できる限り訪問し、お話を聞くようにしています。
- 本市では、ヤングケアラーの相談窓口を設置しましたが、ヤングケアラー自身が相談することはハードルが高いと思っています。だからこそ、様々な支援機関や関係団体など周りの大人たちにヤングケアラーのことを知ってもらい関わってもらうことが大切です。ヤングケアラー相談窓口を中心に色々な分野の方々と一緒に、子どもたちやご家族を支えられるよう取り組んでいきたいと考えています。

## ヤングケアラー支援における多分野・多機関の連携支援体制、役割分担など（イメージ）



## 断られてしまったら、力になりたいけど声をかけたけど、断られてしまった。こんな時、どうしたらいい？

コラム5



上記の事例では、関係機関がしっかりと連携をしてEさんとご世帯の支援をおこなうことができました。この事例のように支援を受け入れてもらえればよいのですが、時に、受け入れてもらえない場合があります。「支援は不要」という子どもやご世帯のことば通り、本当に支援は不要なのでしょうか。ひょっとしたら、ことばと気持ちが一致していないのかもしれない。また、今は家族でケアの分担がうまくいっているかもしれませんが、誰かがケアを担えなくなった途端に子どもたちの負担が大きくなる時があります。

私は、地域でケア付き子ども食堂の活動をしています。その活動の中で出会った子どもとのエピソードをご紹介します。～「大丈夫？困ったことがあったら、いつでも頼ってよ」とメッセージを送り続けながら見守りをしていた子がいます。高校生になったころ、「中学生のころ、いつも声をかけてくれてありがとう。本当はめっちゃくちゃ困ってて。けど、困ったことがあったらいつでも頼ってよと言いつづけてくれたから、あの時がなげられた。ありがと。ひょっとしたら、ことばと気持ちが一致してなかったかも。直接的な支援でなくても、いつでも頼れる大人が側にいるよと、伝え続けるだけでも支援になる時があります。もし、支援を断られたとしても、引き続き関わり続ける伴走型支援が、子どもの大きな支えになるため、身近な大人が関わり続けることを心がけましょう。



そっかー、でも困ったらいつでも声をかけてね